

古代世界研究会

# かいほう

2014年8月31日発行  
古代世界研究会

No.121

事務局：〒112-8606

東京都文京区白山5-28-20

東洋大学文学部史学科

高島純夫 研究室内

<旅と随想>

## 旅人たちのアーカイブをどうするか

柴田 広 志 (京都府立大学研究員)



写真は、2000年10月、シリアのアパメイアにて撮影の1枚。  
同地の平和が、一刻も早く回復することを祈念して

「旅人と研究者、あなたの本質はこの両面のどちらにありますか？」

…時とところを問わず、このような問いかけを、何度かけられたことでしょうか。

実のところ、海外に行った回数はさほど多くはないのですが、学部生だった2000年にユーラシア横断独り旅を敢行して以来、私には旅人としてのイメージが付いて離れないようです。留学先をエディンバラに選んだ後に

「なぜ、そんな普通のところに行くんですか？」と詰問されたのはご愛嬌にしても、ある懇親会の席で

「得体の知れない人間というイメージだった」というニュアンスのことを言われ、思わず酒盃を取り落としてしまったこともあります。

冒頭の問いかけに対しては、たいいてい「その両者はコインの表と裏みたいなもので、私にとっては不可分です」

と回答しているのですが、… 情情的には、旅人の方に天秤が傾いております。その所為でしょうか、あるいは海外、とりわけ中東地域での経験を豊富に持つ旅仲間との会話が楽で楽しいためでしょうか、最近では研究室の後輩たちよりも、旅仲間たちと一献傾ける時間の方が、歳を経るごとに長くなっているように思います。

私が旅仲間として相対する人々には、ひとつの傾向が存在します。それは、1990年代後半から2002年ごろに旅を生きた人々である、ということです。旅仲間の紹介で、別の旅人を紹介されるということもありますが、その場合にもやはり、旅の時期が重なる人の割合が多くを占めています。

この時期を境にして、何が変わるのか… 私には、旅の情報への対処という点をもって、変化の目印と考えています。

往時、旅人にとって拠点となっていた場所のいくつかは、今でも重要性を失っていません。それはトルコのイスタンブールであり、タイのバンコクであり、ネパールのカトマンドゥであり、エジプトのカイロといったところです。こうした場所で、あるいは幹線となる街道を少し外れたパキスタンのファンザや中国の大理のようなところで、旅人たちは情報を交換し合い、時には「沈没」して骨を休め、そして次の目的地への準備を整えていました。そうした旅人たちの姿は、『旅行人』編集長である蔵前仁一の著作『旅で眠りたい』（新潮社、1995年）や『あの日、僕は旅に出た』（幻冬舎、2013年）に生き活きと描写されています。

旅の拠点は、同時に、情報の集積地でもあります。旅人のたまる場所には、必ずといっていいほど、先を進んでいった、あるいは逆方向から進んで来た人たちの記録である「情報ノート」が置かれていました。こういったところで私は

必ず情報ノートに目を通してメモを取り、自分の足跡も記していきました。莫大な情報の整理に1日を費やした、ということも珍しいことではありません。

こうした状況が変化したことを感じたのは、2005年にエジプトとトルコに遊んだ時でしょうか。情報ノートへの記入量の激減については、他の旅仲間からもしばしば聞いておりましたが、己の目で確かめて、改めて慥然としたものです。旅の情報は、ノートから旅のウェブサイトへ書き込まれるようになり、書き込む場がさらに拡散して蓄積されることが無くなり、2005年ころには口コミの状態に退化して、今に至っています。

顧みられることがなくなった情報ノートは、いま、どうなっているか…

中には宿ごと消え失せたというケースも珍しくないのですが、私の知る限りでは、間違いなくひとそろい、エジプトのカイロに残されています。2000年以降の私の旅仲間のひとりが、今でも当地にあって、そのころからの情報を保管しているのです。

旅人にとっては、情報は新しくなくては意味がありません。したがって、一向に更新されない情報ノートは旅人にとっては価値がなく、それをよくぞ保管してくれているものだと思います。

その一方で、日本に帰ると書庫や図書館に引きこもっているこの身にとって、こうした情報ノートの史的価値は、計り知れません。旅に焦点を当てた研究もちらほら見かけますし、何より世紀の変わり目にあたっての貴重な現地情報や旅人の息遣いを、そのままに残しているのです。常日頃、史料の少なさを嘆いている身にとっては、その価値に思いを致して身震いすることも多々あります。

問題は、激動する当地の情勢に加え、その旅仲間がいずれは日本に帰ってくるということでしょう。何とかして、旅人たちの珠玉の記録を、

日本に持ち帰ってくることは適わないか。旅の本は幾多あれど、旅の記録を記したウェブサイトも多くあれど、そうした形では残らない、世に出されることもありそうにない、旅人の生の記録を何とかできないものか…

旅を、とりわけ

「海外の一人旅なんて、特別な人にしかできませんよ。だって、怖いじゃないですか」

と、平然と言う人間が年々増えてきているように感じて、疲労と悪寒を感じることも多々あります。気ままな独り旅すら押し潰されそうな、昨今のこの国の情勢を憂える文章を、あるところで活字にしました（「書評 下川祐治著『香

田証生さんはなぜ殺されたのか』『子規研究』3、佛教大学坪内稔典研究室発行）。そうした

「旅を殺そうとする」

方向性が大勢を占める前に、せめて旅人たちの記録を、私の好きな人たちが埃まみれの輝きに満ちていた、あのころの記憶と記録を保存しておきたい。そして、後に続く人たちの道しるべとして置いておきたい…

そんなことをぶつぶつと呟きながら、放置していた論文の追い込みで疲れ果てた身を銭湯の湯船に沈める、今日この頃です。

<学会参加記>

### 第3回古代地中海世界コロキウム開催@BSA開催

佐藤 昇 (神戸大学)

夏には土埃舞うギリシアの街も、春の緑は瑞々しく、アネモネの赤が燃えている。2014年4月、25日、26日の2日間にわたり、アテネのブリティッシュスクール (BSA) で「第3回古代地中海世界コロキウム The Third Colloquium in the Ancient Mediterranean World」が開催された。桜井万里子東京大学名誉教授とC. Morgan ロンドン大学 KCL 教授・BSA 館長が中心となり、2005年に第1回コロキウムがロンドン大学で開催された後、2009年に第2回大会（東京大学）が開かれ、ようやく第3回目が催されることとなった。

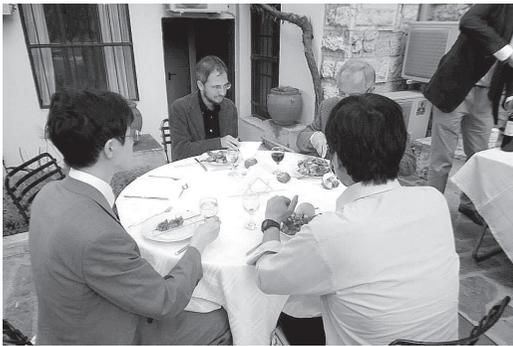
第2回のコロキウムに関しては、本誌103号（2010年2月）に簡単な報告を書かせていただいた。（筆者の個人HPでも公開中。URLは、<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~nsato/profile.html>）。その後、時間は幾分かかったものの、この時の報告を基にした論集が、雑誌『KODAI』の特集号として間もなく出版される予定である（諸般の事情から、最終的に寄稿を断念されたケー

スもあり、またその他にも、我々だけではコントロールできない事情もあって、今回の出版に関しては難しさを感じるが多かった。『KODAI』編集部には、深く感謝をしている）。

この間、第3回に向けての準備もまた、万事順調に進んでいった訳ではないが、何とか開催までこぎつけた。今回はMorgan教授の厚意により、BSAで開催することができた。世界各地のギリシア史研究者が足を運ぶ、伝統ある機関を会場とすることができたのは、大変栄誉なことだと思っている。共通論題は、主に日本側で考案し、Myth, Sanctuary, and Historiographyとしていた。近年、神話や歴史叙述に関する研究が盛んに行なわれていることに鑑みたテーマ設定であり、また現地ギリシアの碑文学者や考古学者などと意見交換をはかるのにも良からうと思われた。誰もが皆多忙を極める中、ぎりぎりの調整の結果、日本側からは8名、欧州側からは9名の報告者を得た。

会場となったBSAのUpper House Seminar

Roomに足を運んだのは、17名の報告者と、Morgan 教授、R. Pitt 副館長をはじめとするBSAのメンバーが中心であった。学会は、こじんまりとした、仲間内の研究会といった雰囲気が進めることができた。質疑応答も概ね活発で、日本人側から比較的積極的に質問が出たのは、こうした雰囲気も手伝ってのことだったのかもしれない。小休止の間も、クッキーやコーヒー、紅茶を手に、日欧の出席者は（徐々にではあれ）うちとけた雰囲気でき、ときに学術的内容のある会話ができたのではないかと思う。



初日のBBQでテーブルを囲む田中、藤井、リザキス、カミア各氏（左手前から反時計回りで）

初日には9本の報告が行われた。桜井万里子氏のオルフィズムとデルヴェニ・パピルスの報告は、日本のまわり地蔵信仰との比較なども取り入れたもので、欧州の研究者の関心を惹いた。竹内一博氏（Athens）は、アッティカのディオニュソス信仰に関わる碑文を取り上げ、テキスト校訂の問題などを考察した。現地で博論を準備している氏ならではの報告であった。私は、ディデュマをめぐる神話が、ヘレニズム諸王やミレトスの植民都市との関係、近隣地域（とりわけクラロス）との競合関係などから変容していく様子を論じた。D. Braund氏（Exeter）は、黒海沿岸のギリシア植民都市におけるアルテミス信仰の拡大などについて議論した。上野慎也氏（共立女子）は、プラトン『ファイドロス』をテキストとして、そこから郊外をめぐるディスクールを読み解く試みであった。J. McNerney氏

（Pennsylvania）は、ヘラクレイデスの旅行記を題材とし、ヘレニズム時代アテナイの描写のされ方を分析した。藤井崇氏（京都）は、キプロス島における皇帝礼拝の碑文を利用し、そこに見られる皇帝と聖域、そして神話の関係について事例を紹介し、考察を加えた。F. Camia氏（National Hellenic Research Foundation）は、ギリシアにおける皇帝礼拝に注目し、とりわけローマ皇帝がギリシアの神々の名前を冠して崇拝されていく様子を描き出した。周藤芳幸氏（名古屋）の報告は、古代ギリシアと戦前の日本における神格化について、比較考察を行うものであった。朝の9:30から夕方まで、小休止やランチを挟んで、全ての報告を聞いた後は、BSAの中庭でバーベキューを行ない、参加者で歓談を楽しんだ。ただこの時は、テーブルに着席する形になったため、多くの人と会話することはできなかった。

2日目は、7本の報告が行われた。師尾晶子氏（千葉商）は、テミストクレス建艦決議碑文について、碑文が作成された紀元前3世紀という時代背景から検討を試みた。B. Earley氏（BSA）は、18世紀の著述家たちが、古典期ギリシアの国際関係を如何に描いたのか、受容史的観点から分析を加えた。E. Strazdins氏（BSA）の報告は、フィロストラトスが描くヘロデス・アッティコス像について分析したもので、考察は、作家本人のアイデンティティなどに及んだ。昼食を挟み、午後はX. Arapogianni氏（the 38th Ephorate of Antiquities）とA. Makres氏（the Hellenic Education & Research Center）による報告で始まった。トゥーリア遺跡（メッセニア地方）の発掘成果報告である。2012年に周藤氏とともに同遺跡を訪れたばかりの私には、いっそう興味をそそるものであった（我々は主にミュケナイ時代のチェインバートゥームを観察したのだが、今回の報告ではローマ時代の浴場跡や碑文などが扱われ、遺跡の多様な側面に気づかされた）。今回の欧州側参加者の中で、唯一、前

回も報告した A. Rizakis 氏 (National Hellenic Research Foundation) は、ペロポネソス半島出土の碑文から、ローマ支配期 (前期帝政まで) にこの地域に生じた人口流動、社会変動について分析を行った。碑文史料による限界も感じられはしたが、ローマ時代のギリシア世界にも関心を広げている私にとっては、これもまたよりいっそう興味深いものと感じられた。田中創氏 (東京) は、古代末期、5 世紀前半に活躍したキュロス (シリア) のテオドレトスによる『教会史』を扱い、その歴史叙述が、史書執筆当時の歴史的、政治的環境に強い影響を受けたものであることを説いた。最後は、J. Karavas 氏 (College Year in Athens) による、古代末期の前線に関する報告であった。ハドリアノポリスの戦い (378 年) の後、ドナウ下流域のローマ帝国防衛拠点が如何に変化したのか、個別の遺跡の状況と全体像の変化について検討が加えられた。報告終了後は、緑の芝が美しい BSA の中庭で、簡単なカクテルパーティが開かれた。大きく枝を広げるピスタチオの木の下で、Morgan 教授、桜井教授が最後の挨拶をする。全ての報告が終わった安堵の気持ち、互いが何を研究しているのか了解して、認知し合った安心感、楽しい会が終わってしまう一抹の寂しさを感じながら、最後の会話を楽しんだ。

翌日は、Pitt 氏と日本側参加者で、国立考古学博物館のアンディキシラ Αντικύθηρα 特別展を

見学した。これは、同博物館に収蔵されていたアンディキシラ関連遺物を一カ所に集め、より詳細な解説やビデオ解説などを加えたものである。本来は短期間で終了していたはずが、好評のため会期延長という形で続いていた。有名な『アンディキシラの機械』の、小さな部品に細かく刻まれた碑文をいつまでも見つめ続ける日本人集団は、些か異様だったかもしれない。



ピスタチオの木の下で話す Morgan 教授と桜井教授

日本で開催し、欧州から研究者を招聘した前回に比べると、全体の運営を任せてしまえる気楽さがあり、個人的には会をより楽しむことができた。また諸々の理由から、欧州の若い研究者が参加してくれたことは、今後の学術交流にも何かしら資することだろう。今後も、こうした学術交流が継続的に行なわれるよう、いろいろな面で努力していきたい。なお、会の様子は BSA の Facebook でも閲覧できるようになっているので、興味があればご覧いただきたい。

## <海外調査>

# サルディニア踏査報告記 —フェニキア・カルタゴ文化の痕跡を訪ねて

佐藤育子 (日本女子大学学術研究員)

前号の「かいほう」120号で、青木真兵さんが第8回フェニキア・カルタゴ国際学会の報告をしてくださった。私自身にとっては、2009年にチュニジア・ハマメットで開かれた第7回の

それに次いで、今回が2回目の参加・発表である。北京での日韓中西洋古代史シンポジウム終了後、一旦成田に戻り、その後サルディニアに飛ぶという強行軍であったが、政変をまたいで、

チュニジア人研究者 M・H・ファンタール教授と子息の M・ファンタール氏の元気なお姿を拝することができ、また懇意にして頂いているシチリア・パレルモ大学の G・ファルソーネ教授とも再会を果たすことができたことが嬉しかった。

学会はすでに前半の2日間が終了し、私が参加できた3日目午後には、既報の通り、近隣のモンテ・シライヤやサンタンティオコの遺跡見学が組み込まれていた。学会終了後の6日目には、サルディニア島南部のノラ遺跡や州都カリアリに残るネクロポリスと国立考古学博物館を見学するエクスカージョンに参加した。学会参加者とともにそぞろ歩きを楽しみながら遺跡巡りを楽しんだが、参加者の中には、以前来日された J・P・モレル教授の姿もあり、そのフランクなお人柄には感銘を受けた。中に、小柄な品のよいご婦人がいらしたが、お嬢さんが日本に留学した経験があるという話題で盛り上がり、失礼ながらお名前を、と伺ったところ、小さなお声で「アマダシ」とおっしゃられた時の私自身の驚きは、一瞬言葉を失ってしまう程であった。M・J・アマダシ女史、フェニキア語碑文研究の第1人者の一人である。カリアリの国立考古学博物館で、アンタスやサンタンティオコ出土のフェニキア語碑文に関して彼女と話ができたことや、地中海出土の最古のフェニキア語碑文として有名なノラ碑文（1773年発見）をじっくり見学できたことも、望外の喜びであった。



ノラの石碑 カリアリ国立考古学博物館蔵

その日はカリアリでレンタカーを調達し、一旦学会で宿泊していたカルボニアのホテルに戻った。学会参加者の大半はその翌日の飛行機で帰国したのだが、学会開催期間中、同じホテルに1週間も滞在していれば、おのずと顔見知りや親しく話しかけてくれる研究者もできてくる。中でも、ベルギーの E・グーベル教授やフランスの E・ピュシェ教授たちとの出会いは印象深く、彼らと4年後の再会を固く約束して別れた。

さてそれからが、我々にとってははいよいよ踏査の開始である。サルディニアにおけるローマ化の過程に関心をもつ青木さんと、それ以前のフェニキア時代やカルタゴ時代のサルディニアに関心を抱く私にとって、今回の踏査はサルディニアにおける文化の連続性を問う意味でも、意義のあるものになるのではないかと期待が膨らんだ。



タッロス遠景

踏査の行程は都合6日間であったが、1日目は、まずカルボニアを出発し、途中山あいにあるアンタス神殿に立ち寄り、その後フェニキア人の入植拠点の一つ、タッロスを目指した。夕方、カブラスの博物館で、タッロス出土の遺物（トフェトから出土した副葬品や奉納石碑等）を見学する。翌日は、まず、タッロスの遺跡を実際に歩いてみることから始めた。オリスターノ湾に細長く突き出た岬の上に位置するタッロスの町は、まさにフェニキア人が好んだ立地条件を備えている。ここにはすでに先住民の集落があったことが確認されているが、それが一旦放棄された後、前8世紀の後半にフェニキア人が

入植して都市をつくった。カルタゴ時代には貴金属製品や装身具などを生産し輸出する地域の一大センターとして隆盛を極め、その後、ローマ時代に至るまで連綿と人が住み続けた。ヌラーゲの建造物を再利用したトフェトや、それに隣接するローマ時代の円形状の遺構跡（用途については諸説ある）も大変興味深く、また、カルタゴ時代の神域がローマ時代に神殿として再建されている事例からは、在地の宗教や文化の連続・継続性について改めて考えさせられた。

タッロス遺跡を見学した後、島を北上し、2日目の晩はサルディニア第2の都市サッサリに泊まった。サッサリでは、学会で知り合ったサッサリ大学の学生さんに青木さんがコンタクトを取り、大学構内を案内してもらうことができた。なお、4年後の学会も今回同様サッサリ大学が主催し、再びサルディニアのオリスターノで開催されることが決まっている。3日目は、一路サルディニアの東海岸に位置するオルビアを目指して車を飛ばした。本来ならば休館日であったオルビアの考古学博物館を運よく見学することができ、館内の丁寧な展示内容と豊富な資料には驚かされた。その後、地図を片手に、現在のオルビアの町並みの下に眠る古代のオルビアの町の痕跡をたどることにした。パウサニアスによれば、オルビアの町を建設したのはギリシア系の人々であったが（『ギリシア案内記』10巻17章5節）、やがてコルシカ島のアラリア沖の海戦（前535年頃）でギリシア勢力を押し留めたカルタゴの支配下に入り、その後、ローマ時代にいたるまでサルディニア島東部の唯一重要な港湾都市として機能を果たした。歩いてみると面白いことに、現在の線路は古代の道路に沿って敷かれ、その向こうにカルタゴ時代からローマ時代にかけてのネクロポリスが広がっていたことや、カルタゴ時代の市域が現在の町の通りのやや高い地点に位置することもわかった。このように実際に町を歩いてみることで、当時の様子を少しでも体感できたことは、非常に有意

義な経験であったように思う。その後、オルビアから内陸部に向かい、3日目はヌーオロ近郊のオリエーナに宿泊した。この辺りは急峻な山々が自然の境界となり、ローマ文化も及ばなかったバルバジアと呼ばれる地で、沿岸部との生活の違いは食文化にも顕著に表れている。

4日目は、ヌーオロの国立考古学博物館を訪ねた後、内陸部を横断し、オリスターノ経由でキャリアまで一旦戻った。フェニキア人の遺跡がサルディニア島南西部沿岸一帯



ボローレ付近のヌラーゲ

に集中している一方で、島の内陸部から北部にかけては、先住民の文化であるヌラーゲの遺構が各地に点在している。単体の塔状の建造物を基本とし、時にはそれらがいくつも組み合わせさせて複雑な複合体を構築するヌラーゲがサルディニア島に出現したのは、紀元前2千年紀半ば。現在、島に残るヌラーゲは7000から8000を数えると言われ、すでに崩壊・消滅してしまったものを加えれば、その総数は軽く12000を超えたであろうと推定されている。確かに、島内を車で走ると、そこかしこに残存状況は比較的悪いもののヌラーゲ状の建造物が目に飛び込んでくる。それは小高い丘の頂上にあったり、あるいは平原の中に忽然と姿を現わしたり、中には民家の私有地の一角を占めているものさえもあった。ヌラーゲを見に行こうとして、その廃墟跡で犬に追いかけられたり、牛の大群の群れに遭遇したりしたことも、今となっては懐かしい思い出である。

5日目は、キャリアリからバルミニ方面に車を

走らせた。世界遺産に登録されているバルミニのヌラーゲ複合体を見に行くことが目的の一つにあったが、途中のヴィツラマールという町で、偶然にもカルタゴ時代のネクロポリスの跡を発見したのは大きな収穫であった。前6世紀後半、カルタゴは度重なる軍事遠征でサルディニアを支配下に置き、やがて内陸支配を強化して行く。つまり内陸におけるこのようなネクロポリスの存在は、フェニキア時代は沿岸部に留まった勢力拠点、やがて内部へと拡大・浸透していく過程を物語るものであると言えよう。

最終日は、南部の海岸沿いを車で走り、ノラ遺跡のある現在の町ブラを經由し、トフェトの存在が確認されているピティアまで行く計画を立てた。ごく最近、ノラ碑文に関する新たな読みが、近隣のヌラーゲ社会との関係の中で提示されたのを受けて、小高い丘のヌラーゲの人々

と海辺のフェニキア人コミュニティとの関係はどのようなものであったか、検証する目的もあった。残念ながら、現在トフェトが公開されていないピティアの位置を特定するには至らなかったが、プラ近郊に位置するサッロクの間部から海岸部を臨み、高台のヌラーゲ社会と低地のフェニキア社会の状況を、周囲の地理的景観とともに確認できたことは有意義であった。

以上、今回、我々がサルディニアで回ることができた遺跡は限られたものであり、十分な踏査が行えたとは言い難いが、それでも、現地に行き初めて知り得たことなど、日本には分からないこともたくさんあった。フェニキア・カルタゴ研究は、いまだ日本では緒に就いたばかりであるが、いずれ、きちんとした形で報告できる日が来ることを願って、ひとまずは筆を擱こうと思う。

## 2013/14年度 西洋古代史サマーセミナーのお知らせ

- (1) 日 時：2014年9月21日（日） 12時30分より
- (2) 場 所：東洋大学 白山キャンパス 8号館7階 125周年記念ホール
- (3) テーマ：「支配と従属——今後の研究進展の手がかりを求めて——」
- (4) プログラム（詳細は別途案内）研究発表（報告者：古山正人、高島純夫、藤澤桜子、紺谷由紀 敬称略・報告順）全体討議 総会 懇親会（参加費500円）

### <委員会関係>

【2013/14年度 第2回】 2014年6月21日（土） 於 東洋大学

1. サマーセミナーについて
2. 日韓中シンポと科研費申請について
3. かいほう関連

【2013/14年度 第3回】 2014年7月19日（土） 於 東洋大学

1. 会計状況
2. 総会について
3. サマーセミナー
4. 科研費申請について
5. 科研費以外の助成金について

### <編集後記>

いきつけの床屋のマスターがかえりぐま還熊八幡さんという近くの趣ある神社の氏子さんといひ、どうやってなるのですかと訊くと、町内会とおんなじで特に何かをしてなったわけではない、と意外なお返事。その後しばらくして、回覧板に還熊八幡さんでの夏越祭の案内と封筒が。中には「ひな型」が入っており、前の晩に布団の下に敷いて寝たものを持参して茅の輪をくぐって納めるとのこと。町内会と神社の関係がなんとなく見えてきました。ひな型と一緒に茅の輪をくぐって初穂も納めてきました。地元とのご縁も少し深まったでしょうか。 〈齋藤貴弘〉